

都留を、観察し、記録する

FIELD NOTE

no. 97 Jun.

特集
は
い
ま
る

木に学ぶ春夏秋冬
クワ畑の跡をたどる

フィールド暦

猫や歌丸

ぬくもりでつくる

FIELD·NOTE no. 97

contents

特集 / はじまる

08 連載第3回
木に学ぶ春夏秋冬

12 クワ畑の跡をたどる

14 フィールド暦

16 猫や歌丸

19 ぬくもりでつくる

24 てくてく都留さんぽ
No.5 川音響く散歩道

26 ムササビ観察日記

28 連載 水路を歩く
第1回 生かす水

31 積み重ねていく

35 後編
おばあさんの思い出
～総司さんの生涯～

38 都留の風景写真集
陽春の候

40 こてんさんぽ
連載第4回 よもぎ

42 身近な動物たちの変化を記す

44 センサーカメラが写した動物たち



柔らかい陽がアブラチャンの葉に差し込み、オトシブミの仲間が影絵のように見えました(2018年4月20日)



散策中、目にとまったマム
シグサ。若葉のように澄ん
だ緑色をしていました。垂
れ下がる葉をめくってみ
ると、クモが隠れていまし
た
(2018 年 5 月 20 日)



Field • Map

今号での取材先

- ① 都留文科大学 p8-11
- ② 本学うら山 p12-13
- ③ 猫や歌丸 p16-18
- ④ あんしん
ansin p19-21
- ⑤ かちゅう
家中川沿い p24-25
- ⑥ 十日市場 p28-30
- ⑦ はらしちこうどう
原七弘堂文具店 p35-37
- ⑧ 道の駅つる p40-41

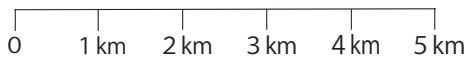


都留市データ

総人口 30,448 人

面積 161.6km²

(2018 年 4 月現在)





②都留市文化ホール駐車場わきにある、
本学うら山への入り口の一つ



③「猫や歌丸」の店先。富士みち沿いに
店を構えている



④谷村町駅前から出て、正面に見えるオ
レンジ色の建物が「ansin」



⑦谷村町駅を出てすぐ右手にあるのが
「原七弘堂文具店」





はじまる

はじまる、と聞くと気持ち揺れる。

今いる場所から新しい場所へと飛び出すのはちょっと怖い。

だけど一歩踏み出して、外の景色を見てみたい。

そうやって葛藤しながら飛び出してみれば、

新しい世界がはじまる。



自然科学棟の屋上から撮影した本学 (2018 年 4 月 16 日)

連載 第 3 回

木に学ぶ春夏秋冬

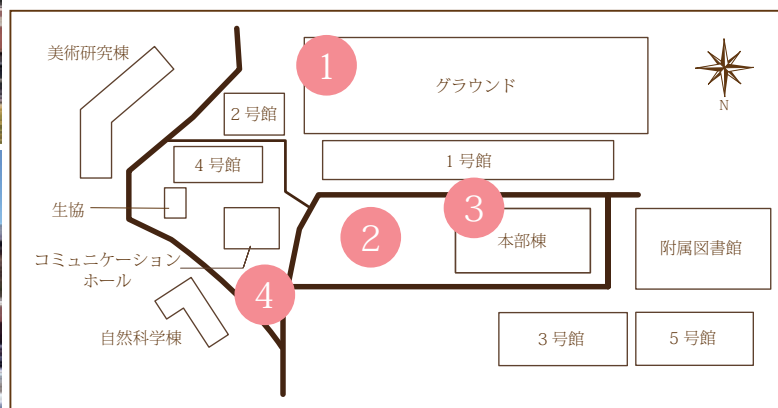
ほとんど毎日目にする、本学に根付く木たち。自らを語らない生きものの変化に目をやると何が見えてくるのだろう。自然観察の初心者である私にとって、山に入らずとも、もっとも身近で触れあえるこの木たちと四つの季節を過ごしてみたい。

新年度のはじまり、春。私たち人間は新しい環境に身を置けけれど、木は変わらず同じ場所に立ち続ける。

平岡摩梨菜 (社会学科 3 年) = 文・写真



秋：2017 年 11 月 7 日／冬：2018 年 1 月 26 日



本学キャンパス内 MAP



秋：2017年11月17日／冬：2018年2月2日／春：2018年4月29日

2 メタセコイア

大量の雪が溶けたあと、ほかと比べて色が薄く、冬芽の姿が無くなった枝が見られた。もう枝から葉が伸びることもなければ、枝自体が成長することもないようだ。対して順調に冬を越した枝は、見るみるうちに葉を付けていく。芽を出してから大きくなるまで、葉はどんどん色が濃くなった。5月目のメタセコイアの色と、^{かげろう}ベタ塗りのような青空。私は陽炎が揺れる猛暑日を思い出した。



秋：2017年11月7日／冬：2018年2月2日／春：2018年4月29日

1 ケヤキ

「もっと控えめだったでしょう」と言いたくなるくらい、芽吹いてからの変化が著しかった。近くを通りかかるたびに、二度見し、いつの間に！と毎回驚いてしまうほど、日に日にケヤキはモッサリしていった。去年の紅葉の全盛期よりも葉の量は多い。年を重ねるごとに増えるのだろうか。冬には頼りなく伸びていた新しい枝もどんどん太く、しっかりとしてきた。成長を感じ、親のような気分に浸ったケヤキとの春だった。



秋：2017年10月26日／冬：2018年2月2日／春：2018年4月29日



秋：2017年10月30日／冬：2018年2月2日／春：2018年4月29日

4 トチノキ

葉をしっかり付けると、トチノキは少し人間との距離が近くなる。それは葉の重みで、私の手が届きそうな位置まで枝が下がったからだ。今までは「お高くとまっちゃって」と思いながら首を動かして観察していたので、視線を少し上に向けるだけで見ることができるのはうれしかった。根元の地面からはトチノキの新芽がたくさん生えている。いつか高く伸びたトチノキを越えるような日がくるのだろうか。

3 イチョウ

今まで春のイチョウを見ずに過ごしてきた私は損をしていた。イチョウといえば秋の紅葉のイメージだったため、ほかの季節では目がいくことはなかった。しかし春のイチョウも負けていない。一つの冬芽から5～7枚の葉が競うようにからだを伸ばす姿が、かわいらしくてほっこりする。少し成長した葉は、太陽に透かしたときの若草色が春の朗らかさを体現しているようだ。季節を問わず映える木なのだという事に気付かされた。

芽吹くまで

1 ケヤキ

2 メタセコイア

3 イチョウ

4 トチノキ

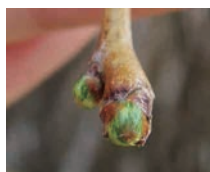
4月3日



よく見ると芽鱗(※)にひびが入り、芽の中心あたりが緑色に変わってきている



バラの花のように、葉が組み合わさって芽吹いていた



上から見たときにてっぺんの芽鱗が少しずつはがれ、緑色の新芽が見えてきている



冬と比べると、芽が1.5～2倍ほど大きくなっていた

4月9日



私が観察した限りでは、冬芽一つに対し葉が1枚伸びていた



芽に触ってみるととてもやわらかい。大きさは2.5センチほどだ



芽鱗がすべてはがれ落ち、新芽が丸まった状態でむき出しになっている



生後間もない人間の赤ちゃんのような、シワシワの新芽が伸びはじめた

4月14日



新しく伸びた枝は赤色で、葉の大きさは2センチほどだった



中心の軸のような部分をよく見ると、組み合わさって芽吹いた名残が見られる



一つの冬芽から、5～7枚の小さなイチョウの葉が伸びた



シワシワだった葉がピンとしてきた。役目を終えた芽鱗は今にも落ちそう

その後



観察しているケヤキでは見られなかったが、同じく学内に生える別のケヤキで見られた花。葉の緑になじんでいて目立たない(4月16日)



5月中旬には実がいくつか見られるようになった。左のものは実の先から葉が伸びている。(5月27日)



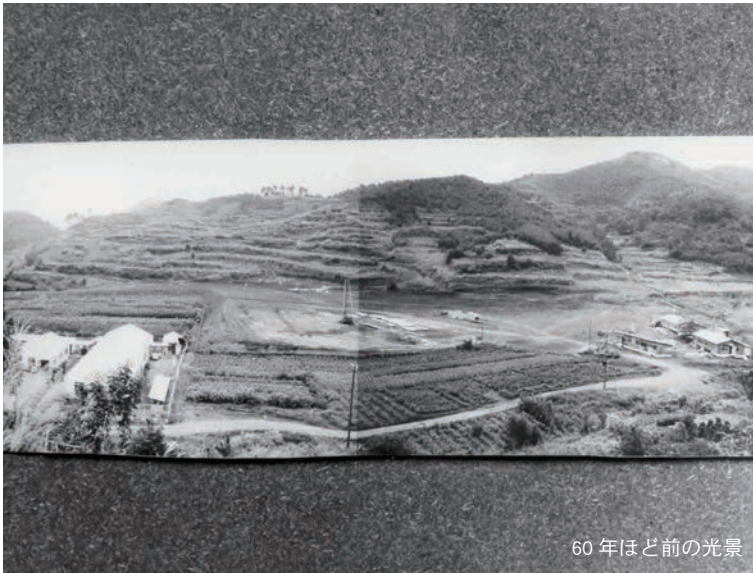
花がじっさいに咲いている場面を見逃してしまったが、気が付くと地面にたくさんの花が落ちていた(4月29日)



冬を越えて新しく伸びた枝の先端に咲いた花。散りはじめると、次は実がなっていた(5月16日)

クワ畑の 跡をたどる

杉浦茜（国文学科3年） 文・写真



60年ほど前の光景

上の写真は昭和40年ごろに撮られたもの。たくさん木に覆われていないからか、今よりも山は低く見える。日当たりも見晴らしもよさそう。斜面には段々畑が広がっている。段々畑ではクワが育てられていたそう。今同じ山を見上げても、その面影は無いように思えた。けれど山のなかを歩くと、60年以上経った今でもクワ畑の痕跡を見ることができる。



上の写真と同じ方向を撮影（2018年5月4日）

畑の名残を見つける

都留市文化ホール（通称：うぐいすホール）の駐車場わきから山へと入っていく。山道に入って5分もしないうちに、地面にできた段差が目に見え込んでくる。この段差は段々畑の跡だ。高さは場所によってまちまちで、130センチくらいものから2メートルはゆうに超えるものもあった。

段の斜面を上ると平坦な地面が広がる。まだそれほど背の高くない木がぽつぽつと生えていて、黄緑色の新緑が低い屋根根のようになっている。葉と葉のあいだから漏れた日の光が、足もとまで届く。

沢の跡をまたいで、馬道（※）を見下ろしながら山道を歩く。歩き出してから50分くらいが経ったところ。畑の斜面に、葉の長い植物が生えていた（左ページ写真④）。今までの道中では見たことのないものだ。それはヒガンバナだった。ヒガンバナは田畑の近くによく植えられる。高校生のとき、畑の近くにヒガンバナが植えられていたのを見たことがあった。このヒガンバナは、畑がまだあったころに植えられたもののだろう。

▲ 分裂したクワの葉



- ① 畑のようす。レジャーシートを敷いてお弁当を広げたくなる空間だ(2018年4月13日)
 ② クワの葉には分裂しているものもあり、そのほとんどが若い木なのだろう。山のなかで見つけたものはすべて不分裂だったので、十分に成長した木なのだろう
 ③ 写真右側に写る人物の身長は162センチ。人が並ぶと段の高さがよく分かる
 ④ 道中で見つけたヒガンバナ。花の季節は過ぎ、葉をたくさん蓄えていた
 ⑤ アブラチャンをたくさん見かけた。黄緑色の新緑に日光が反射してまぶしい(記載のないものはすべて2018年4月20日に撮影)

山道を歩いていると、ちらほらとクワの木を見ることが出来る。クワが畑で育てられていたときは、収穫しやすいよう低い高さを保たれていた。人の手が加わらなくなった今ではクワの木は生長を続け、葉は頭上を覆うほどになっている。今クワの葉を収穫しようとしたら、首が疲れてしまいそうだ。



こんなにも身近な山なのに、昔はクワ畑だったなんて知らなかった。ただ遠くから眺めているだけではクワ畑の痕跡は分からない。それはクワ畑が朽ちたあとに植物たちが毎日すくすくと生長を続けたからだろう。じつさいに山を歩いてみればクワ畑の跡を見ることが出来るし、それを覆ってしまうほどの植物の生長にも驚かされる。

何かが終わってしまうとき、それは何かが始まるときでもある。クワ畑がその役目を果たしたとき、自然の力で植物たちの生長が再びはじまった。

【参考文献】

『講談社園芸大百科事典 第7巻』講談社 1980年
 『樹木の葉実物スキャンで見分ける1100種類』山と溪谷社 2014年

※本学のうら山にあたる尾崎山では、戦前まで馬による木材の運搬がおこなわれていた。この馬が通る道は「馬道」と呼ばれ、今でもその跡が残っている

フィールド暦

厳しい寒さの季節も終わり、日中になると夏を思わせるような気温になる日もあります。1日の気温の変化が激しい春。生きものはどのように過ごしているのでしょうか。今回は4月から5月にかけて、都留市内で出会った生きものを紹介します。

本学フィールド・ミュージアム=文・写真



イカリソウ(2018年4月15日)@戸沢

日かげで下を向くようにして、咲いていました。花の直径は2、3センチほどです。花のかたちに特徴があり、花の茎など地上に出ている部分は生薬としても用いられるそうです。



キブシ(2018年4月15日)@戸沢

天神峠(『フィールド・ノート』93号参照)の峠道で見つけました。花の大きさは直径1センチほどで、十数輪ほど連なって咲くのが特徴です。



ヤマツツジ(2018年4月21日)@大幡峠

県道712号線の通る、大幡峠の頂上付近で撮影しました。鮮やかな朱色の花で、一輪の大きさは5センチほどあります。50輪以上咲いているようでした。



イチリンソウ(2018年4月27日)@田原3丁目

本学キャンパスの西側にある林縁に咲いていました。都留市では4月下旬から直径4センチほどの花を咲かせます。草丈は約20センチあって、葉には深い切れ込みが入っています。



スズムシソウ(2018年4月27日)
ラン科の植物で、草丈は約25センチです。淡い紫色の花を数輪つけます。貴重な植物で、近い将来絶滅のおそれがある絶滅危惧種ⅠB類に指定されています(※)。



メジロの巣(2018年5月16日)@田原3丁目
街路樹として植えられたアメリカハナミズキに、メジロがつくった巣を見つけました。ビニールのひもなどの人工物やコケを巣の材料に使っています。



タチツボスミレ(2018年4月15日)@戸沢
一つの株から、小さく淡い紫色の花が10輪ほど咲いていました。花の大きさは直径約2センチです。この株の周囲にも同じスミレが咲いていました。



スミレ(2018年4月21日)@大幡
大幡地区にある、富士急山梨バスの「^{たから}宝鉾山」バス停付近の路傍から、花を咲かせていました。アスファルトのすき間から生長している姿に力強さを感じます。

コラム

スミレいろいろ

春はスミレの咲く季節です。
都留市内で見ることのできる
スミレを紹介します。



エゾアオイスミレ(2018年4月21日)@大幡
アオイスミレの仲間ですが、咲いていた時期から考えると、エゾアオイスミレだと考えられます。都留市内でも標高の高い「宝の山ふれあいの里」で見つけました。

猫や歌丸

「猫や歌丸」は2018年4月1日にオープンした。お店に引き寄せられるようにして扉を開けた私は、店主である石川弘子さん（58）に出会った。

自分の欲しいものが仕事に

「猫や歌丸」では手作りの和雑貨やアクセサリーが販売されている。石川さんはおもに樹脂を固めて作るディップアートと、着物のはぎれを使った吊るし雛の制作販売をしている。お店ではそのほかにも、一貫張り（※）を作る古谷里美さん、店主の義理の妹さんによるフェルト作品が並ぶ。

石川さんは着物が好きだ。お店をはじめめる前から着物に合うアクセサリーや、着物をリメイクした服を作ってきた。ディップアートをはじめめるきっかけとなったのも、当時欲しかった桜のかんざしがディップアートできていたからだ。有

名なかたの作るものでとても高価だったそう。ならば自分で、と見よう見まねで作った。その後も作り続け、友人にあげることもあったという。石川さんは自分のために作っていたものが、人に喜んでもらえることを知り、2年前からインターネット販売をはじめた。それから約40、50のディップアート作品を作ってきた。インターネット販売を続けていて、「これは仕事になる」という思いが湧いてきたそう。

目を引く扉

現在お店を構えている場所は4年前まで「武川米専門店」という米屋で、おもに山梨県産のお米を取り扱っていた。石川さんは家業として

店名は15年飼っていた猫の名前から





入り口横のスペース。赤く塗られた壁とタイルが目を引く

お店に立っていた。しかし、旦那さんが亡くなったことでお店を閉めたという。それからというもの、お店の玄関部分は常にシャッターが下りている状態だった。当時、石川さんはインターネット販売で得た自信から、お店をもちたいと思いはじめていた。そんなとき、閉店してから目を背けていたお店の存在に気づく。シャッターが閉まっていると玄関部分が暗く「防犯のためにも、明かりをつけたい」という気持ちもあった。

石川さんは2017年3月に再びシャッターを開けた。光を浴びずにいた壁は傷んでいた。重い工具を担いで傷んだ壁をはぎ、セメントを塗った。そのうちにタイルを張ってみようという気になる。作業を進めるほど、新しいアイデアが次々と湧いてきたという。お店の入り口部分となる玄関扉は、格子をイメージしてサッシにペイントをした。店内の明かりがほのかに透けて目を引く。店内は9畳ほどの広さがある。小さ



上/店主が最初につ
ったディップアートと
なる桜のかんざし。
ケースのなかに大切
にしまっている
下/ディップアートの
パーツ作り



店主の石川弘子さん

※日本の伝統芸能の一つ。竹や木のかご、ざるに和紙を重ね、さらに柿渋（渋柿の青い果実から搾った液）を塗って作られる。入れ物として使われる





米屋をやっていたときから時を告げる振り子時計

なオレンジ色のライトに照らされた店内に一步入ると、昔にタイムスリップしたような心地になる。大きな唐傘。1時間ごとに時を告げる振り子時計。天井から吊るされた吊るし雛。それぞれが昭和レトロな空間を演出している。床に張られた市松模様のタイルや、電球を覆うために囲んだ和紙、備えつけの棚まですべて石川さんの手で作られたものだ。設計図はあったのですかと尋ねると、「自分のなかにある構想（レト

ロな感じにしたい）だけをたよりに手を動かした」とおっしゃる。

ものの作りがすき

お店を開店してから、大変だったことについてうかがうと、「お店を作る期間ずっと楽しかった。作りたい店を作っちゃった」とおっしゃる。作らなければという急ぎや焦りではなくて、作りたいものを作り続けていたらできていたという感じがいい。重い工具を担いで壁をはがすこ

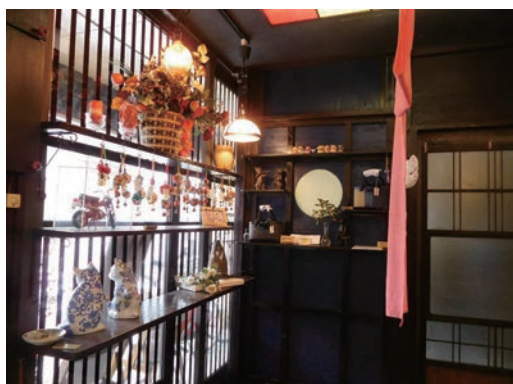
とも、細かな針金に樹脂を塗って色を付ける繊細な作業も、石川さんにとっては大して変わらない。イメージ通りにでき上がればうれしいし、できなければ悔しい。形になったときの達成感や自信が、次のものの作りへとつながっていく。石川さんの一つひとつのアイデアが、「猫や歌丸」を形作る。お店作りが一段落して満足感に浸っている石川さん。しばらくはマイペースにお店を営んでいきたいと語る。

お店を作ったことによって、興味をもつて人が訪ねてくるようになった。会話をしたりお茶を飲んだりしているとき、「お店を作ってよかった」と感じるそう。現在も改造したい箇所やお店の使い道に対して、構想がふつふつと湧いているようだ。

自分が欲しいと思えるものを作る。石川さんの一貫したものの作りの姿勢に私は引き寄せられたのだ。

江利そらむ（社会学科3年）Ⅱ文・写真

ディスプレイのようす。猫の置物がいたるところに置かれている



猫や歌丸

〒402-0053
山梨県都留市上谷 4-1-6
TEL 090-3535-4710

ぬくもりでつくる

富士急行線谷村町駅^{やむらまち}を降りて目の前にあるのは、イタリア料理店「ansin」^{あんしん}。
 鮮やかなオレンジ色の外装は、まだお店をはじめて間もないことを想像させる。
 どんな人がこのお店をはじめたのだろうか。「ansin」の店主である小山田^{おやまだ}
 一繁さん^{かずしげ}（46）にお話をうかがった。



上：オレンジ色の外装は、谷村町駅周辺で一番目立つ。入口の引き戸が親しみやすい（2018年5月11日）

下：壁に描かれたメニュー。あれもいいこれもいいと、お店の外で迷ってしまう（2018年4月16日）





れる店内は、きつと小山田さんの人柄があらわれているのだろう。

変わらないこと

もともと古民家だった名残をとどめる入り口の引き戸を引くと、店主の小山田さんが「いらつしい。2階へどうぞ」と笑顔で迎えてくれる。座敷席のある2階は、足を伸ばしてくつろげるような空間だ。座布団に座って、窓から外の景色をながめっていると自然と心が和む。まるでおばあちゃんの家にいる気分になる。背筋を伸ばして椅子に座り、ナイフとフォークを使って食べる……といった私のイメージとはかけ離れていた。イタリア料理店とは思えない温かさ溢

小山田さんは18歳のときに料理の世界に入る。ホテルの厨房に勤務していて、25歳のときに1年間イタリアに修行に行った。それから富士吉田市で20年近くイタリア料理店「KAZU」を営んでいた。そして去年の4月に「ansin」をスタートさせた。「KAZU」は小山田さんのお母さんと一緒に営んでいたが、今は一人で「ansin」を切り盛りしている。谷村地区でお店をはじめたのは、当時一緒にお店を支えていたお母さんが亡くなったのがきっかけだそう。「ansin」は亡くなったお母さんの戒名から名付けた。都留市に親戚がいることもあって、拠点を谷村地区に移した。当時のことを振り返りながら、「お

化粧もあんまりしなくてね、チャキチャキした人だったよ。お客さんにも人気で。名物お母さんでした」と懐かしそうにおっしゃった。

お店にある雑貨などは、お母さんと一緒にお店をしていたときのものをほぼそのまま使っているそう。お店の名前は変えたけれど、変わらずお母さんがいつも近くについて「ansin」を見守っているようだ。

変わったこともあるが変わらないこともある。昔の記憶も大切にしながら、小山田さんは「ansin」を営んでいるのだろう。

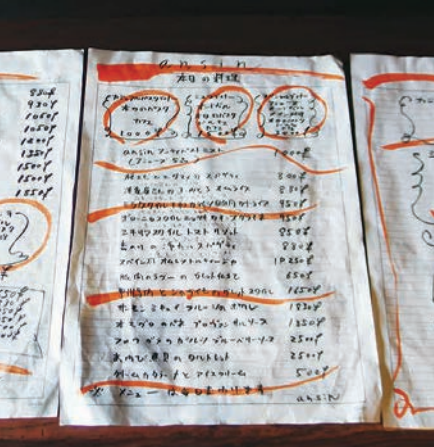
人柄の魅力

小山田さんはどんなお客さんともすぐ仲よくなり、常連さんも多いという。お店をはじめて一番嬉しかったことをうかがうと、「こんな美味しいパスタ初めて食べたって言ってもらえたときはすごく嬉しかった。あと、富士吉田市からわざわざ来てくれる常

連さんもあることかな」とおっしゃる。

美味しい料理と居心地のいい店内で、一度訪れたらまた来なくなる。そんな雰囲気惹かれて、学生も多く来店する。「前のお店はコースメニューが中心で。だけどここは学生の街でしよ。だから(値段)設定を安くしたの。パスタランチとか。ランチじゃないやつでもちよつと贅沢したら食べられるじゃん」。「ansin」は、家では食べられない本格的なイタリア料理をリーズナブルな価格で食べられるのが魅力の一つだ。値段設定を学生に相談したこともあるそう。

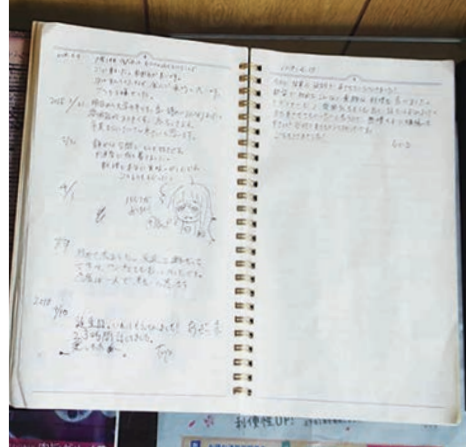




毎日手書きで書き変えているというメニュー(2018年5月11日)



日替わりパスタランチ。この日は桜エビとキャベツのパスタだった(2018年5月11日)



来客用ノート。たくさんの感想が書いてある(2018年4月16日)



2階の座敷席。日差しと窓から入る風が心地よい(2018年5月11日)



1階はキッチンとカウンター席。洋風な雑貨が飾られている(2018年5月11日)

小山田さんは、学生とも分け隔てなく会話をする。小山田さんがお客さんと同じ目線に立っているから、堅苦しくない居心地のいいお店なのだろう。また、「男子だったらポリウム多くなり。パツと見てこの子は食べるなあって思ったら量を考慮して調節します」とおっしゃる。お客さんのことをよく見ていて、細かい気遣いも忘れない。

谷村地区に来て1年とまだ日も浅いが、近所の人ともすっかり打ち解けている。挨拶など声をかけ合ったり、ほかのお店で「ansin」を紹介してもらったりする。近くの宿泊施設に滞在するお客さんが、夜ご飯を食べに来ることもよくある。小山田さんは「谷村地区がもつと良くなったらしいね」と活気あふれる谷村地区を想像する。どんどんまわりの人とのつながりをつくる小山田さんは、すっかりこの地域に馴染んでいるように見える。飾らないお話を

かな性格が、そのつながりを深くさせていくようだ。

最後に、働いているときのこだわりを聞いてみた。「こだわりの特にないね。歳をとってきたってこともあるけど、前の店より肩の力を抜いてやってる気がする。こだわりすぎると自分もお客さんも疲れちゃうね」と笑いながら、「料理はずっとやってきたから、強いて言うなら美味しい料理を提供するってことかな」とおっしゃった。

お母さんへの想いや出会う人とのつながりを大切にしながら「ansin」を営む小山田さん。小山田さんは、肩の力を抜いて気持ちに余裕を持っている。それが私のイタリア料理店のイメージとは違った、ぬくもりのある雰囲気をつくっていた。

宇佐美温加(社会学科2年) 文・写真
佐藤成美(社会学科2年) 写真



はじまる



はじまることは前進することだ。

たとえば自分のイメージを頼りにお店を作る。

それが形になって、さらに作りたいものが見えてくる。

一度なにかをはじめてみると、

ほかにもやりたいことが出てきた。

こうやってはじまるたびに、少しずつ自分の世界が広がっていく。







なにげない小道でも、のんびり歩けば
すてきな景色がみつかります。
あなたも都留を
てくてくお散歩してみませんか。

No.5 川音響く散歩道

今回は都留文科大学前駅から
勝山城跡まで歩きます。
家中川と桂川の川音を聞きながら
春らしい景色を楽しめます



道沿いにかわいらしいお庭の家
が多いのも楽しみの一つ。
空き地にはたんぽぽが

高架下をくぐると
一気に静かな道に

おちつく

三ノ側公園

すぐ横の
土手の上も
電車が走ります

3月には
梅の花が
見ごろです

都留文科
大学前駅から
出発!!

至とおかいらば駅

お手のすぐ裏を桂川
が流れているので、
境内には川の音が
響きわたっています

かがめや地蔵
少し大きく作ってしまい、
お堂に納めることができなかった
お地蔵様。高僧祖暁禪師
の「かがめや地蔵!!」の
大喝でおじきをし、お堂に
ひたりと納まったという
伝説が残っています

赤いほりが
たくさん立っています

境内のお堂には
都留七福神の1つ
毘沙門天が

境内には
草花が
たくさん!

鐘堂と門前の星架木の
組み合わせが印象的

普門寺

桂川

あいの
明和2年
(1765年)
の庚申塔





ムササビが子育てをはじめました

4月2日 子どもが確認されました



3月までたびたび1頭で利用していた巣箱で、4月2日に子どもと一緒にいるようすが確認できました。別の場所で産んだ子どもを巣箱に運んできたようです。昨年と同じムササビかどうかはわかりませんが、今年も子育てに巣箱が使われ始めました。

ムササビ 観察日記

— 5年目 —

2013年、ムササビライブカメラを二つの巣箱に取り付けました。本学ホームページ (<http://www.tsuru.ac.jp>) では『ムササビ観察日記』のブログを更新しており、ムササビのようすをご覧いただけます。みなさんも一緒にムササビのようすを見守っていきましょう。

今号は4月のムササビのようすをお伝えします。

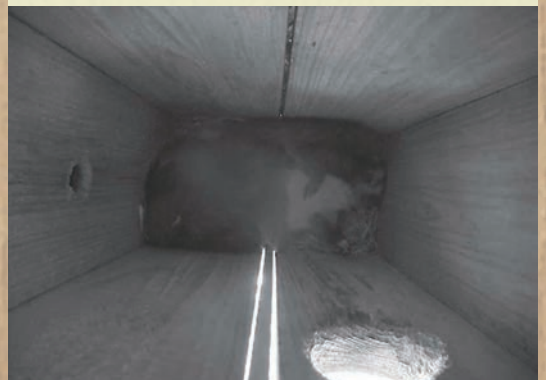
本学フィールド・ミュージアム=文・写真

4月5日 巣材に隠れる子ども



19時すぎに親が外に出ていったあとの巣箱を見ると、子どもの上に巣の材料である樹皮がかかっていた。親が子どもを隠すためにかけていったのでしょうか？ この30分後には親が帰ってきて外をうかがっているようすが見られました。

4月9日 日中の親のようす



夜は外に出ている親ですが、日中は巣箱のなかで寝ています。ときどき巣箱の穴から顔を出して外をうかがっている姿も見られます。子どもは親の下にいて姿が見られませんでした。親は体を広げて寝ているので子どもはどうしているのか気になります。

4月12日 目に見える成長



親が巣箱の穴から顔を出しているときに、子どものようすが観察できました。4月2日はお饅頭くらいの大きさにしか見えなかった子どもが、大人の手ほどのサイズになっていました。体のかたちもムササビらしくなっていて、これからの成長が楽しみです。

4月16日 巣箱からいなくなる……



巣箱を確認するとムササビ親子の姿がありません。昨年はテンが巣箱に入り、子どもが襲われるということがありました。巣箱に乱れはなく何事もなかったかのようですが、親子のゆくえが心配です。別の巣で元気に成長していることを願います。

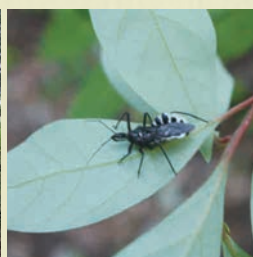
**こうも
ムササビの森**

ムササビライブカメラが設置されている巣箱は、本学美術研究棟横のムササビの森にあります。親は別の巣で子どもを産んでから巣箱にきているようです。そこで、この森に別の巣がないか探してみました。ムササビはおもに樹洞(木に空いた穴)を巣として使います。歩いた範囲で樹洞は見つかりませんでした。そのかわりにたくさんの生きものに出会えました。小さな森がたくさんの生きものを支えていることがわかります。

(写真はムササビの森が2018年5月28日、それ以外は2018年5月10日に撮影しました)



▲ムササビの森。この右奥に巣箱がある



▲ヨコヅナサシガメ



▲マムシグサ(本号裏表紙参照)



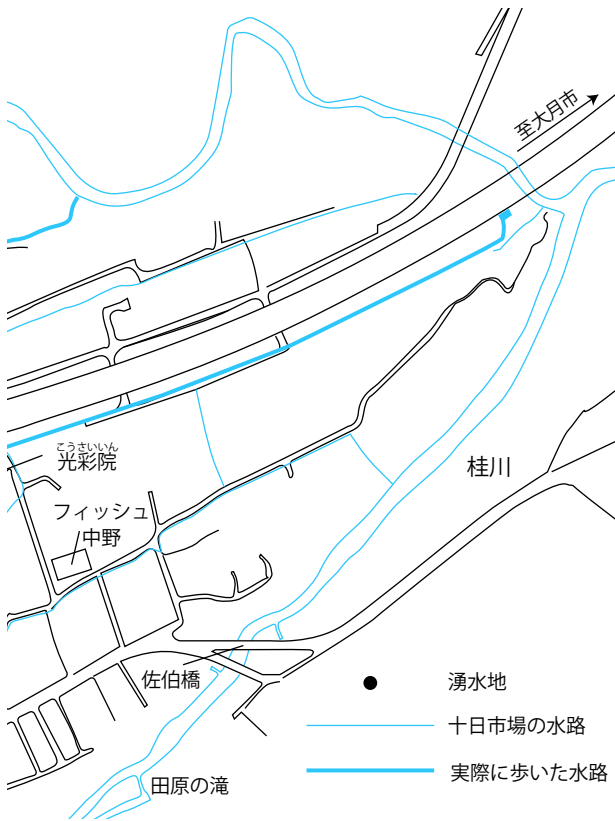
▲エゴノキの花にとまるハチの仲間

水路を歩く

第1回 生かす水

都留市には水路が多い。どこもよどみなく流れ、澄んだ色をしている。そんな水路は私の地元にはなく、都留市に越してきたときには驚いた。第1回は、湧水と人や生きものの関わりに注目する。自分の足で歩き、いまの水路を記録したい。

佐藤琢磨（社会学科3年）＝文・写真



水をたどる

はじめて水路観察をしたのは4月9日の15時ごろ。日が傾き始めていたが、外気温は15度ほどでまだ暖かった。しかし風は強く、手に持った地図が飛ばされそうになる。十日市場地区には湧水地がいくつかある。富士山に降った雨が地下水となり、それが100年ほどの年月を経て地上へ湧き出してくる。湧水は誰でも利用できるようになっていて、その場で飲むこともできる。湧水地の一つである長慶寺（ちやうけいじ）で一口水を飲んでから歩き出す（①）。

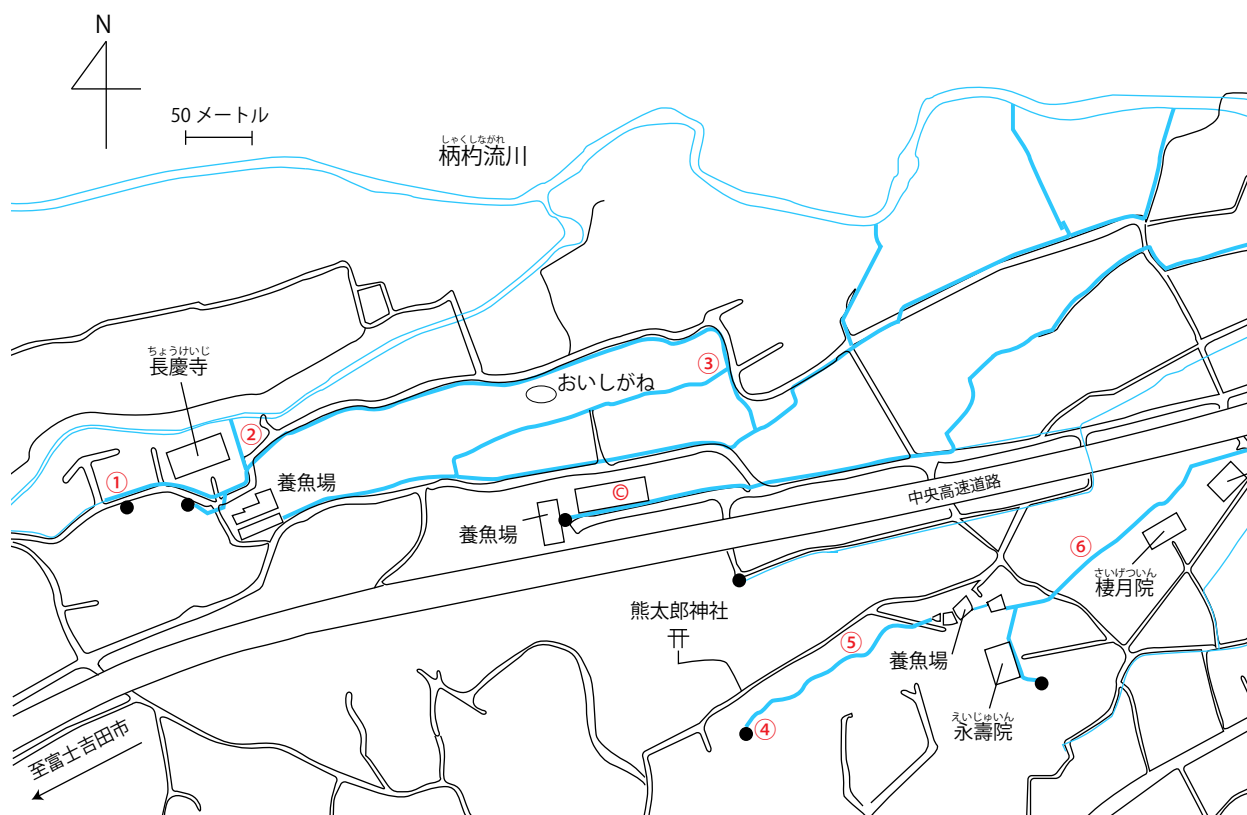
湧水地の近くには、バイカモという水のなかで育つ植物が生育している。バイカモはきれいな水にしか生えない植物で、都留市の湧水地では多く見られる。初夏に開花するようで、小さなつぼみが膨らんでいた。長慶寺の湧水は、流れ出るとすぐに上流からの水路と合流する。合流地

点からパタリとバイカモが生えなくなっていた。道路のわきを通る水路の幅は約60～90センチで、溝の深さは約70センチといったところ。水を追いかけて下流へいく道路から離れると、長慶寺の裏手に流れる水路に出た（②）。その水路は幅が広く、4～5メートルほどだ。湧水を含む上流からの水は、分かれ道でこの広い水路へと流れていく。この水路はそのまま柄杓（しやうしや）流川（なが）に合流する。

水を使う

長い直線から右に折れた先に水路が合流している地点を見つけた（③）。その水路は長慶寺近くの養魚場から流れてくる水路のようだった。養魚場も湧水地の一つだと聞いていた。十日市場では養魚が盛んで、養魚場が3か所ある。そして、そのどれもが湧水地からの流れの途中にある。

水路を下流の方向に歩きながら、



水路が入りこんでいる場所には田んぼがあることに気がついた。田んぼの横には水路があれば水を張ることができない。あたりまえのことだが、水路に注目することであらためて発見した。そう考えると、いま民家の横を通る水路はそこに田んぼがあつたことを現しているようだ。

長慶寺から流れ出る湧水は、大きく分けて4か所から柄杓流川に流れ出ていることがわかった。

水から生まれる

場所を変えて水路の行き先をたどる。熊太郎神社の近くからも湧水が流れ出ている(④)。この湧水地では、近くに住む地域のかたからお話を聞くことができた。

お話を聞いたのは、山本金^{かねこ}子さん。山本さんは都留市に住んで30年以上経つ。地元の人に湧水はどう見られているのか気になり、尋ねると「水があつてあたりまえだから、あんま

り意識していないね」とおっしゃる。夏場になれば、湧水地に水を汲みにくる人もいそう。25年ほど前には

目の前の水路にホタルが多く飛んでいたという。私の知る川では、生きものがいることが日常だった。しかし歩いているときにはバイカモ以外の生きものを見ることができず、ほかに生きものはいないものだと思っていた。「ホタルを」最近はずっと見なくなつた」と山本さんは話してくださった。私もホタルが飛んでいるのを見てみたかった。

水そのものを

熊太郎神社からの湧水をたどると、冬の時期に水掛け菜を栽培している畑がある(⑤)。これも湧水でつくる都留市の名産品だ。さらに下流には民家のあいだをクネクネと水路が通る。あるお宅では水路から水を直接引き、洗い場として使っていた(⑥)。地図を見るだけでは水路

と人の関係は見えてこないが、歩いてみるとおもしろい発見がある。

私は昔から川遊びが好きで、魚捕りや釣りを楽しんでいた。泳ぐこともあったが、水を飲むことなど考えたこともなかった。地元では細い水路にメダカやタニシなどを見ることができたが、十日市場の水路では見ることができなかった。湧水地から流れ出る水は、田んぼや養魚、水掛け菜そして日常生活に使われている。「水」という資源を生活や仕事の一部として活用しているのだ。

水路はおもしろいもので、歩けば「なぞ」が生まれる。湧水地の近くにはなぜお寺があるのか。なぜ不自然に曲がった水路があるのか。昔の水路はどんなものだったか。歩きながら読み解いていくのがおもしろい。今回出会った「なぞ」を次回もさらに深めてみたい。



a. 永壽院前の水くみ場。冷たくて気持ちがいい b. 長慶寺前にあるバイカモ。5月下旬には花を咲かせていた c. 地図上の「おいしがね」の南にある養魚場 (写真はすべて 2018 年 5 月 24 日に撮影)

積

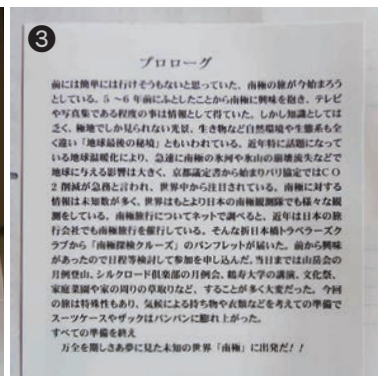
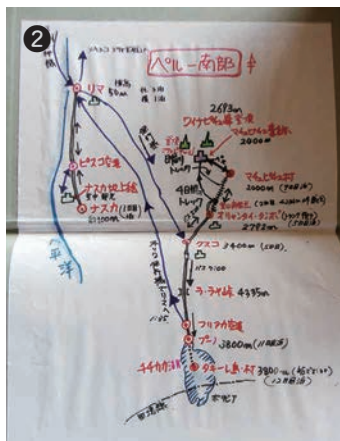
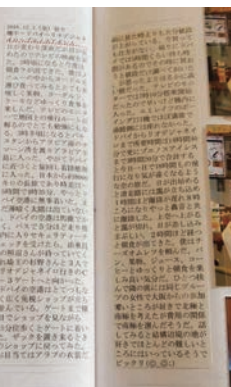
み

重

ねていく

年に数回、藤本紘一さん(73)は趣味で旅行する。旅行から帰ってくるたびに、その旅のようすを写真や文章とともにアルバムに収めているという。そこには、「続けること」に対する藤本さんの思いが詰まっていた。





①写真の横に、この写真を撮ったときの状況とどんな心情だったかが文章でまとめている②藤本さん手描きの地図。見やすくわかりやすい③アルバムの最初には、冒険のプロローグも記されている④旅行中に藤本さんが見た、モンゴルのゲル。職業柄か、スケッチとだいたいのサイズもささっとかける⑤旅行中に書いたメモは40冊以上。リングノートが好きなのだそうです(2018年4月25日)

124冊の冒険記

「初めは軽い気持ちで始めたんだけど、いつのまにか100冊以上になっちゃってねえ。藤本さんは積み重なったアルバムを前にして笑う。藤本さんの職業は土地家屋調査士、測量士。趣味は写真を撮ることと「冒険」だ。藤本さんの冒険は、おもに10日から1ヶ月で日程を組む。異国の歴史や文化、遺跡、自然を自分の目で見たくて旅をするのだそう。それを藤本さんは「冒険」と呼ぶ。

1回の冒険を終えるたびに藤本さんは写真を何冊かのアルバムにまとめる。旅行中に撮った写真はもちろん、その写真を撮ったときの場面や心情がこっと細かにつづられている。そのとき何が起こって誰とどんな話をしてなにを食べたか。じつさいに旅行に行っていない私が読んでもよくわかる。人の旅行記を読むのがこんなに楽しいのだということを、藤本さんのアルバムを読んで初めて知った。

藤本さんは子どものころから外で遊ぶのが好きだったという。中学2年生のとき、登山好きな担任の教師の影響で登山が好きになった。このころから藤本さんは写真も撮り始めた。山に登っては写真を撮っていたそう。藤本さんが40歳くらいのときに出版された深田久弥の『日本百名山』を読んで、自分も百名山登頂を達成しようと思い立ち、本格的に登山を始めた。土日休みをほとんど登山に費やし、57歳のときには百名山登頂を達成した。

せっかくだから今まで撮った写真をまとめて、登った山について記した本でも出そう、と自費出版で本も製作した。写真、文章、レイアウトもすべて自分でやったというこの本には、完成まで1年を費やした。知り合いの国語の先生に文章を見てもらい、なんとも直した。「人に見せる文章を書くから、忠実に正確にわかりやすく。しゃべったことと違って本になつて残るから言いわけがで

①ロシアのカムチャッカ半島でアバチャ山に登頂したとき。奥に見える山はコリヤーク山 ②南極大陸に上陸する寸前で厚い氷に行く手を阻まれた。そのようすを乗客たちが見守っている ③中国貴州省の、肇興という村にて。闘牛で勝利した牛は村に戻り練り歩く ④ペルーのチチカカ湖に浮かぶウロス島にて。先住民の子どもたちと藤本さんの友人を撮影



①から④の写真提供＝藤本紘一氏

きないでしょ。だから本当に気をつけないと」と藤本さんは話す。

電源はつねにオン

2000年ごろから、藤本さんは世界じゅうを冒険するようになった。藤本さんの旅の目的はその土地の遺跡を見て歴史や文化を感じること、その土地の自然に触れること。「都留は自然が豊かでいいですね。人も優しく。年をとって住むなら、こういうところがいいですよ」。自然が好きで自然に囲まれて暮らす藤本さんが、異国の自然に触れる。ふだんとまったく違う自然に触れられる機会は、とてもわくわくすることなのだろう。

写真を撮り始めてから30年くらい経つてようやく人に見せられるような写真が撮れるようになったという藤本さん。なんどもコンテストに出すことによって、今回は何がダメで賞に入らなかったのか、何がよくて入賞して評価されたのかを考えた。応募

するうちに何度か入賞するようになり、2002年には日本版の『ナショナルジオグラフィック』の写真コンテストでも入賞した。

藤本さんは旅行中はすぐにカメラのシャッターを切れるよう、つねに電源を入れておくという。私は藤本さんの撮った写真のなかでも、とくに人を撮った写真に惹かれる。その人の、写真に収めたい一瞬を捉えることは難しい。旅行中つねにカメラの電源を入れ、身につけている藤本さんだからこそ撮れるのだろう。

どんなに小さなことでも

旅行から帰ってくると、1000枚から2000枚の写真のなかから厳選して本当によいと思える写真を選ぶ。「膨大な量から(写真を)選んでいると嫌になることもあるし、会社終わって帰って来て疲れているのに何やってるんだろう、と自分でも思うときがある」と藤本さんは話す。旅行中はいつも小さなメモ帳を携



自宅の離れに「シルクロード庵」と名前をつけて、旅行中に買ったものなどを展示している(2018年4月25日)



シルクロード庵で、「ここでコーヒー飲むのが幸せ」と笑顔で話す藤本さん(2018年4月25日)

帯して、細かくメモを取る。飛行機に乗っているとき、起きた瞬間、さらに食事のときも時間が空いた隙にささっと書く。どんなワインが美味しかった。あの人とこんな会話をした。今回出会ったこの人はこんな生い立ちだった。一人ひとりどんな人だったかを記録して名簿も作るという。その旅と一緒に時間を過ごした人たちの記録も、藤本さんにとっては大事なことになるのだ。そのメモをもとに、次は文章を書く。日本語の使いかたが間違っ

ていないか、物の名称が正しいかなど確認する。何度も直した文章を写真と一緒にまとめ、ようやく完成する。アルバムが出来上がるまでには約1ヶ月かかるという。

「これは人のためにやっているのではないけど、1ヶ月もかけてちゃんとやることで自分が得られるものは大きいですよ。今回だけやめてしまおうかと思うときも、こういうのは1回やめたらもうずっとやらないんだからと言い聞かせて

やります。初めは簡単だけど継続するというのはほんと、大変ですよ。ただ続けられることによってだんだん考えかたとか、文のまとめかたとか勉強するわけですよ。前は文を考えるのに時間がかかったけど今は時間がかからない。人生は一生勉強だなと思いますね」。

藤本さんは学生のころ、外で遊んでばかりで文学が好きではなかったそう。けれど今の藤本さんは本も出版し、誰のためでもなくアルバムの文章一つひとつにこだわる。藤本さんが続けてきたことは確実に藤本さんを変えた。

「やってできないことはないな、とこの歳になって思います。未知へのチャレンジをやめたくないですね」。そう話す藤本さんの冒険は、まだまだ終わらないだろう。

* * *

記録することは昔から好きだったという藤本さん。写真を撮り始めた

中学2年生のころから、写真は全部まとめてとっておいていたのだという。その写真たちがあつたから山の本を作るときも困らなかった。藤本さんの記録する作業はそれほど前から続いていたことだったのだ。

私たちは「都留の今を観察し、記録すること」を目的としてこの冊子を作っている。細かく観察する。正しく伝える。読む人がわかりやすい文章にするためになんども直す。これらの作業を大切にしている藤本さんの姿に、自分の姿を重ねた。ひたむきにその作業を積み重ねてできた、藤本さんのアルバムを読めたことが嬉しい。

続けてきたこと、積み重ねてきたものはその人のかたち、づくつていく。これは藤本さんの言葉一つひとつから見えてきたことだ。藤本さんの目の前で積み重なったアルバムが、それを何よりも証明していた。

高橋光(比較文化学科3年) 文・写真
佐藤成美(社会学科2年) 写真

後編

おばあさんの思い出 ～ 総司さんの生涯 ～



富士急行線の谷村町駅前にある「原七弘堂文具店」のおばあさん（85）が昔の思い出を教えてくださいました。前号では、お話のなかで印象に残った戦時中の思い出について書きました。今号では、おばあさんのお父さんである原総司さんについて書く。

憧れを抱く

「うちのなかで一番古いアルバムってこと」。お父さん、お母さんの学生時代からの写真が収められているというアルバムだ。どれも白黒の世界で身なりをきちんとして、背すじもピンと伸ばして写っている。ニコニコとした表情や日常生活のよ

感がある。

おばあさんが一枚いちまい、ていねいに「こんな話を聞きました」と話してくださった。スーツをピシッと着て、タイプライターで書かれた書類をカバンに入れて、仕事に出かける姿。軍服をしつかり着こなして、戦争中も戦後も家族を養いとおした姿。話のなかの総司さんは、仕事熱心で誰からも慕われていた。

「太く短く生きた人よね」。総司さんは54歳という若さでこの世を去った。語り尽くせない、かつこい生きざまに私は夢中で聞き入る。大正、昭和を力強く生きた総司さんの生涯に、私は憧れを抱かずにいられなかった。

上. 昭和16年に撮影した家族写真。一番右がおばあさん。当時は小学校4年生。1人の妹と、2人の弟が写っているが、ご兄弟は全員で8人いたそう。おばあさんの横に座っているのがお父さんである原総司さん。左隣にいるのが総司さんのお兄さん。その隣がお母さん。後ろの右のかたが和文のタイプストで、おばあさんのいとこ。この写真のときは、働き手になる女性は工場に派遣されたため、女中さんは写っていない

下. 紺色のアルバムがおばあさんのお母さんのもので、年季の入って淡く緑がかったアルバムがお父さんのもの



駆けるような人生

総司さんは明治32年、千葉県旭村（現在の佐倉市）で実川家の次男として生まれた。当時の小学校は8年制だったが、義務教育だったのは4年間のみだった。総司さんは8年通った。卒業後は佐倉中学校へ進学し、勉強が好きだった総司さんは大学進学も果たした。

「勉強もそうだけど、経済的にも通い続けられる人は少なくって。大学の同期の集合写真を見せてもらうと、50人いるかいなか。卒業したときの写真ではないかという。本当に限られた人しか通えなかった。

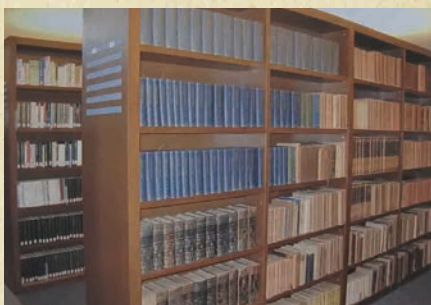
大学を卒業したのは大正12年。当時は徴兵制があつたが、大学への進学者は一時的に免除された。総司さんは卒業後に兵役に向かう。高等文官試験（現在の司法試験）を通過するため、総司さんは兵役のあいだも勉強をした。「夜になると全部消灯されちゃって勉強する場所がない

ですって。トイレだけは一晚中（灯りが）ついてるつちゅうんで、トイレに（勉強道具を）持って行って勉強したんだって」。高等文官試験は、当時20代の人合格すれば新聞で大きく報じられるほど難しい試験だったそう。やがてトイレで勉強していたのが、軍の連隊長さんに見つかる。すると連隊長さんが部屋に招いて、一晚中勉強をさせてくれたという。

兵隊になるための訓練のほかに、一年兵から将校までみんなで数日かけて歩く大演習というものがあつた。甲府市から歩いて、富士山の裾野で兵隊訓練をして、甲府市へ帰る。試験の結果を知ったのはこの演習をしているときだった。合格者は「官報（※1）」という紙面で知らされるため、総司さんは演習の合間に抜け出して見に行ったそう。「そのときの嬉しさつたらなかったって」。声の調子があがつて、総司さんの合格の瞬間が語られる。この話を総司さんから何回も何回も聞いたのかも



総司さんの大学時代の集合写真



家に並んでいた法律の本。山梨学院大学に寄付したあとに撮ったもの

弁護士になったころの写真。高等文官試験に受かったのは30歳を過ぎたころ

- ※1 政府から一般に周知させる事項を^{へんさん}編纂して、国立印刷局から刊行する政府の機関紙
 - ※2 ある官に任命されるまで官庁の事務を^{じっち}実地において練習するもの
 - ※3 訴訟法上、作成の権限を有する者が、一定の場合に法定の事項を記載した書類で、証拠として裁判の資料となるもの
 - ※4 写^{しゃ}字・清書などによって報酬を得ること
- （『広辞苑第6版』岩波書店 2008年）



しれない。翌年、少尉に任命されて一年の兵役を終えた。

「富士急行の（土地の）買収をするのに弁護士が必要なんだっちゅうんで、声がかかったみたい」。勉強する場所を貸してくれた連隊長さんから思いがけない機会をもらう。連隊長さんは富士山麓鉄道（現在の富士急行株式会社）のご子息、2代目社長になるかただった。声をかけられたときはまだ弁護士にはなっていなかった。軍の演習終了後、試補（※2）を経て一人前の弁護士となり、買収について行った。連隊長さんのその言葉がきっかけで都留市に来ることになる。

昭和5年。お見合い結婚をしたのちに、現在の谷村町駅前にあるお家を建てた。私は、お見合い結婚の話にも驚いた。奥さ

んは香川県の出身で、お見合い写真を見ただけ。しかし初めて待ち合わせたときには、もう結婚の準備をしていたという。仕事といい、結婚といい、総司さんの決断には優柔不断という言葉がない。驚きの連続だったが、潔い決断はかつこいとい、私は思った。

総司さんのまわりの登場人物とのめぐり合わせは、まるで運命だったかのようにスパッととはまってい。総司さんを中心にすべてがうまくいくように見えるけれど、エピソードをとおして考えてみると、それは努力の賜物だとわかる。私は全力でまわりを巻き込んでいく総司さんに憧れる。

総司さんの事務所

玄関を入ってすぐに総司さんの事務所の応接室があつて、奥の部屋に事務員さんがいるのが常だった。応接室から奥までずらつと判例体系などの、仕事に使う法律の本がたく

さんあつた。貴重なものだったので、山梨学院大学から寄付していただけないかと声がかかつて、現在家にはない。「トラックが2回に分けて運んだからね。すごい量だったんだね」。

タイピストも事務所には欠かせない存在だった。まず裁判の内容が速記された調書（※3）の清書を筆耕（ひつこう）（※4）屋にお願いする。その後、正式な文書にするためにタイピストがタイプライターを使って打ち込む。今はない職業だ。

おばあさんのお話のなかに女中さんがたくさん出てくる。「先生、どここの娘さんが礼儀見習いしたいつちゅうもんだから、女中として雇ってくれないかい、って」。女中さんが家にいるのはふつうだった。タイピストになりたいから事務所の仕事を手伝いたい、という女中さんもいたという。学校を出たあと仕事を手伝いながら勉強をする書生さんも来ていた。「昔は講義録っていう、通信教育の教材を書生のためにとつ

ててね。なんだか女中さんにもとつてあげてたようよ」。書生さんのみならず女中さんにも学ぶ機会を用意していたという総司さん。立場も時代も関係ない。話を聞きながら、懐の大きさに感銘を受けた。

前号に続き、おばあさんは私が知らない時代の状況をていねいに教えてくれた。兵役、お見合い、今はない職業。当時のようすは今とは違うことばかりで、まるで物語を読んでいくようだ。でもそんな違う時代を生きていたはずの総司さんの姿に私は憧れる。消灯されても意地でも勉強をする。思いがけないチャンスに逃さない潔い決断。女中さん、書生さんへの思いやり。

今私が生きている時代は、総司さんの生きた時代と違う。しかし総司さんの話をいつの時代に聞いても、私は憧れるだろう。

佐藤成美（社会学科2年）＝文・写真



@田原 4 丁目



@十日市場



@十日市場

都留の風景写真集 陽春の候

2018 March-April

都留のまちを歩いていると何気ない動きや表情、身近な自然に目がいきます。春のうららかな陽に照らされてほっこりした風景を写真に収めてみました。

今号の担当：江利そらむ（社会学科 3 年）



こっちゃんぽ

連載第4回

よもぎ

難しく考えずに、気軽に古典を楽しんでほしい。たとえば、お散歩しながら歌を口ずさむみたいに。きっと当時の人の気持ちが変わるはず。
今回は、よもぎ団子を作っているおばあさんのお話と一緒に、私のお気に入りの和歌を紹介します。

中里真琴（大学院文学研究科2年）＝文・写真
小泉篤広（社会学科3年）＝写真

大変な作業

安留和子さん（71）は、上野原市から毎日

暖かくなると、用事もないのに外を歩きたくなる。さまざまな花や昆虫を観察しながらのお散歩は、新年度の慌ただしさを忘れさせてくれる。道ばたの日当りのいい場所を探せば、よもぎは簡単に見つかる。この時期は30センチほどの背丈で、左右対称な葉の裏側に白い毛が生えているのが特徴だ。

よもぎは、お餅やお団子に混ぜて食べられる。都留市大原にある「道の駅つる」。そこでよもぎ団子を買っているかたがいると聞いて、4月30日にお話をうかがった。

よもぎ団子や酒饅頭を届けにきている。4年前からよもぎ団子を作り始め、知り合いの魚屋さんと販売してもらっていた。2年前に「道の駅つる」がオープンしたため、こちらでも取り扱ってもらうことにしたという。お昼過ぎには売り切れてしまう人気の商品だ。

毎年3月から4月にかけて1年分のよもぎを採り、冷凍保存をしておく。人が入らな

い場所に生えた綺麗なよもぎを選ぶそうだ。たくさん採っても、汚れを除いたり茹でたりするとほんの少しになってしまう。冬によもぎが足りなくなると、雪の降らない静岡県まで行つて新芽を摘んでくるそうだ。

お団子作りは毎朝4時半に始まる。よもぎを茹でてペースト状にし、蒸かしたての米粉に練りこむ。この作業がとくに大変で、手が真っ赤になるほど熱々の米粉を、一生懸命練るという。今は上野原市のゴルフ場にも出店しているため、1日に70個くらい作るそうだ。「とにかく大変な作業ですよ」と笑う安留さんだが、それでも続けている理由がある。

自然なものを届けたい

安留さんのよもぎ団子の原材料は、米粉・小豆・よもぎ・砂糖・塩のたった五つ。消費期限は1日だけだ。着色料や保存料を使わず、「自然なお団子を届けたい」というのが、安留さんのこだわり。

安留さんがお団子作りを始めたきっかけは、友人と一緒に昔の食べものを再現しようとしたことだという。昔の人たちは食品添加物の無いものを食べていたため健康だった。





知り合いのおばあさんたちから、昔食べていたものの情報をたくさん集めたそう。「若い人たちにも自然で懐かしいもののよさを伝えたい。そうして喜んでくれるお客さんがいるから、どんなに大変な作業でも頑張れる」と安留さんは優しい笑顔で話してくれた。ご自身のお子さんやお孫さんにもお団子を作るという安留さん。作りながら、自然と想いが短歌になった。左が安留さんが作られた短歌だ。

たらちねの 母の想いや
まじゅうを
今日は来る日か 嫁いだ子らに

お団子が包まれているラップをめくると、ふわりとよもぎのいい香りがする。気取らないパッケージから、一つひとつ手作りしている姿を想像して温かい気持ちになる。大好き

なおばあちゃんの手料理を食べているみたいな、懐かしくて優しい味がした。

さしもぐさ

よもぎをお餅に練り込んで食べるようになったのは、室町時代なからだ。それ以前は、よもぎはおもに乾燥させてお灸として使われていた。古典の世界でのよもぎは「さしもぐさ」と呼ばれることが多い。『小倉百人一首』にも取られているさしもぐさの和歌は、私が一番好きな和歌だ。

かくとだに えやはいぶきの
さしもぐさ
さしもしらじな 燃ゆる おもひを

こんなにもあなたのことを想っていると、口に出して言うことなどできない。だからこ

存知ないでしょう。この燃えるような恋心を。

お灸がじりじりと燃えるようすと、熱い恋心をかけて詠まれたこの歌は、藤原実方がとある女性に初めて贈ったもの。和歌の才能に優れ、光源氏のモデルとも言われる彼も、こんな歌を残す。千年前の知識人から人間味を感じられるのも、古典の楽しいところだ。



街なかでよく見かけるよもぎ。地味で目立たない、つい見落としがちな植物だ。しかし、そんなよもぎから人の温かさを感じたり、昔の恋に思いを馳せたりすることができる。「よもぎ」を漢字で書くと、「蓬」。草かんむりに「逢う」と書く。人と人との出逢いをつくる、そんな植物のような気がした。



- 上：「道の駅つる」のお団子売り場。似顔絵はお孫さんが描いてくれたそう（2018年4月30日）
- 中：「添削してください」なんて恥ずかしそうに自作の短歌を教えてくれた（2018年5月16日）
- 下：よもぎの葉。裏側に白い毛が生えている（2018年5月16日）

身近な動物たちの変化を記す



本学キャンパスうら山。写真左側が楽山、中央が大桑と呼ばれている(2018年4月16日)

自分の住む街のまわりには、どのような動物たちが暮らしているだろう。そんな疑問を解き明かすため、本学フィールド・ミュージアム部門では2009年から都留文科大学のうら山で自動撮影カメラを使った動物の調査をしてきた。今年でちょうど10年となる調査から見えてきた動物たちの変化や継続的な定点調査の面白さを振り返る。

西丸堯宏(本学卒業生)=文
本学フィールド・ミュージアム=写真

「楽山・大桑、くもり(雲量7)、9時15分。楽山公園のすぐ上でアオバト。近いがブッシュ(注・藪のこと)で姿を捉えられない。2〜3個体がいる。オカトラノオ、ホタルブクロが咲く。ハナイカダの実は黒く熟す。ツリバナの実は青く堅いまま……」——
2012年7月24日

手元に残る野帳の最初のページには、こんな言葉が記されている。2009年の野帳もあるはずが、引越しのどきくさで家のどこかに埋もれてしまった。

野帳とは、フィールドノートとも言われ、野外での調査を記録するノートのことを指す。僕の場合、見たもの・聞いたもの・感じたことなどをメモすることが多い。見返すと覚えていないことばかりで、過去を振り返るのに大事な記録になっている。

自分で調べる楽しみ

都留文科大学のうら山に通うようになって、今年で10年目。学生時代は、道ばたの植物の名前を一つひとつ覚えていくだけで楽しかった。道に動物のフンが落ちていれば拾っ

て中身を調べて、種子や骨が出てくると、さらにそれを同定(注・種を識別すること)した。フンのなかの種子を同定するために、種子標本づくりに励んだこともあった。

とにかく、見るものすべてに興味を湧いて、本来ズボラな性格でありながらも、いろいろと自分で調べてみる楽しさをこのとき初めて知った気がする。

写真から浮かび上がる変化

うら山には2009年から、赤外線センサーが付いた自動撮影カメラを設置している。動物がカメラの前を通ると、赤外線に反応してシャッターが下りる仕組みだ。

僕はおもに自分の足で歩くこととセンサーカメラの二つで、うら山にどんな動物たちが暮らしているのかを記録してきた。その10年の記録から浮かび上がってきた変化がある。

たとえば、ニホンジカとノネコの撮影される頻度が大きく増していることだ。ニホンジカはうら山を歩いても痕跡が色濃く、足跡はもちろん、俵形のフンや樹木の角研ぎ痕などを目にしない日はない。ノネコは街にいる個



▲うら山ではじめて記録されたアライグマ。全国ではしだいに分布を広げているようだ(2014年4月1日)



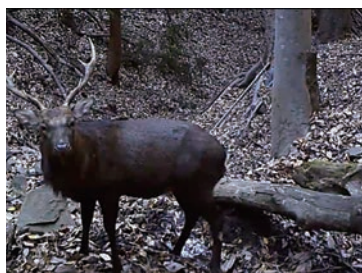
▲一般に高山の動物とされるカモシカが、うら山の低山でも記録されるようになった(2011年5月10日)



▲タヌキはキャンパス周辺で見かける。その一方でノウサギは個体数が減っている(2015年2月18日)



▲センサーカメラにはクマの姿も写るようになった。森が大きく変化しているのかもしれない(2015年6月24日)



▲ニホンジカのオス。うら山では、近年、鳴き声も聞こえるようになった(2014年11月15日)



▲ノネコ。うら山の奥地でもノネコが記録されるようになった。個体数も多い(2014年10月12日)

出会わずに「いる」ことを知る

体がうら山にも出入りをしているようだ。ア
カネズミなど野ネズミのなかまを捕食したよ
うすのほか、より山奥のほうでも撮影され
ようになってきた。
こういう事実が徐々に浮かび上がってくる
のは、センサーカメラを使った調査の面白さ
の一つだ。

そこに「いる」と思っていなかった動物に
気づけるのは、センサーカメラならではの面
白さだろう。カモシカやアライグマが撮影さ
れたときは、「まさかいるなんて」と自分の
目を疑ったことを覚えている。ヤマネも人づ
てに「いるはず」と聞いていたが、撮影され
て初めて存在を実感した。

しかし撮影されたからと言って、一時的に
見られただけなのか、日常的にうら山に暮ら
しているのかは写真だけでは分からない。10
年近い調査でも、これらの動物の撮影回数は
わずかだ。より実態に近づくには、ふだんか
ら森を歩き、ほかの調査を工夫するなどして
確かめることが大切になってくる。

たとえば、アライグマはうら山での痕跡の
記録はなく、撮影されたのも一度きり。そう
なると、たまたまアライグマの移動中に撮影
された可能性が高い。いつぼうでヤマネは巢
箱調査をした結果、うら山に広く暮らしてい
るらしいことが分かってきた。

そこに「今」どんな動物が暮らしているの
か。それは地道に現場で調査をすれば、かぎ
りなく事実には迫ることはできる。しかしそこ
でどんな変化が起こっているのかは、過去の
記録なくしては分からない。今を記録するこ
とは、将来、変化を知る大きな手がかりを残
すためでもある。

野帳の2018年4月21日のページにこう
記した。

「夏鳥の飛来が早い。キビタキ、クロツグミ、
ヤブサメ、センダイムシクイ……」

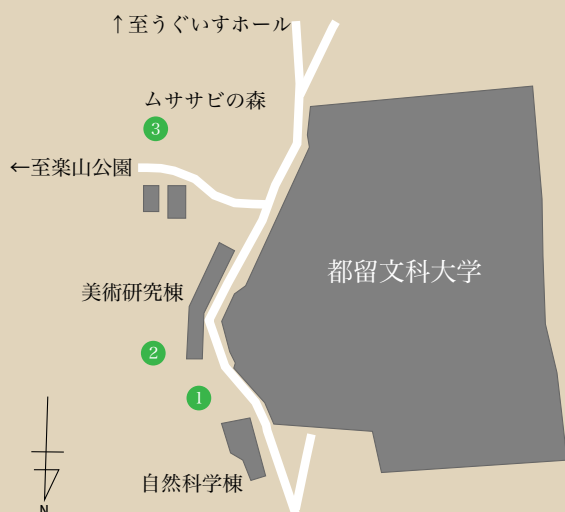
書いてはみたものの来年はもつと早いかもしれない。この記録を5年後、10年後に見返したとき、うら山ははたしてどうなっているだろうか。

センサーカメラが 写した動物たち

本学フィールド・ミュージアム＝文・写真

日に日に気温が上がってあたたかくなり、春がやってきました。動物たちも
のびのびと過ごしているように見えます。今回は4月13日から5月14日
までのあいだ、ムササビの森と本学のキャンパス周辺の3か所で、動物た
ちの生活をのぞいてみました。

センサーカメラマップ



撮影に使ったカメラ



本学フィールド・ミュージアムでは、
センサーカメラ（赤外線を感知すると
自動でシャッターが切れるカメラ）を
しかけて、動物の姿を観察しています

① 自然科学棟裏の水路

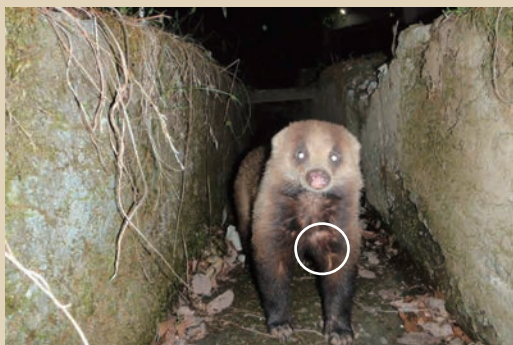


テン (5月1日 6:12)
胴が長くて足が短い、イタチの仲間です。木のぼりが
得意です。肉食の動物なので、樹上で暮らすムササビ
の子どもを襲うことがあります



ガビチョウ (5月2日 15:51)
体の色は茶色で、目のまわりが白いのが特徴です。都
留市内ではここ10年ほどのあいだに個体数が増えま
した

2 美術棟裏の水路



アナグマ (4月15日 20:00)

カメラを見ているアナグマのようすを観察できました。暗闇のなかで目が光っています。白丸で囲った左足の付け根の毛が抜けていて、けがを負っているようです



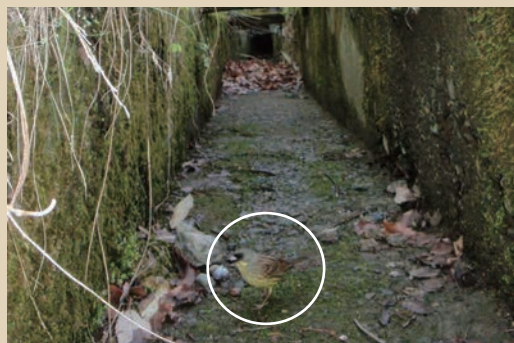
ヤマガラ (4月18日 15:38)

本学のうら山でも見られるヤマガラを水路の近くでも観察することができました。エゴノキの実が好物です。木の実を蓄えあとで食べる習性があります



アナグマ (4月18日 18:54)

再びアナグマを撮影することができました。この水路が通り道になっているのでしょうか。夜行性のアナグマは、ミミズを主食にしています



アオジ (4月19日 7:48)

胸からお腹にかけての部分が黄色いのが特徴です。目の部分が黒いので、オスです。体と水路の色合いが似ていて、最初に見たときはどこにいるのかわかりませんでした

3 ムササビの森



ネコ (4月16日 6:28)

早朝にムササビの森を歩くネコが見られました。白い靴下を履いているような模様が特徴的です。このほかにも毛の色の違う2匹のネコがいました



タヌキ (5月3日 21:53)

足が太く、ずんぐりとした体型をしています。今回の観察ではアナグマが8回もカメラに映っていたので、見間違えそうになりました。タヌキのほうが尻尾が太いので、見分けられます

FIELD NOTE

no. 97 Jun.

発行人

北垣憲仁 (42-43,48)

統括編集者

西教生

編集長

山内利奈 (46)

副編集長

小泉篤広 (6-7,14-15)

平岡摩梨菜 (8-11,46-47)

宇佐美温加 (19-21,48)

佐藤成美 (4-5,35-37)

編集

塚原瑞穂 (24-25,46)

中里真琴 (40-41)

小俣溪和 (26-27)

窪田りさ (46)

江利そらむ (16-18,22-23,38-39)

佐藤琢磨 (28-30)

杉浦茜 (1,12-13)

高橋光 (2-3,31-34)

関唯伽 (44-45)

寄稿

西丸堯宏 (42-43)

ロゴデザイン

工藤真純

[] は編集担当ページ

FIELD・NOTE no. 97

発行日：2018年6月26日

発行部数：2700部

発行・編集：

〒402-8555

山梨県都留市田原 3-8-1

都留文科大学

地域交流研究センター

フィールド・ミュージアム部門

『フィールド・ノート』編集部

E-mail : field-1@tsuru.ac.jp

バックナンバーは都留文科大学地域交流研究センターにありますので気軽にいらしてください。

編集後記

カルチャーショック

culture shock を受けたこと



から

う ちの背中かじって。これは私が大学に入学したてのころ、山梨県出身の友人に言われたセリフだ。郷に入っては郷に従え。噛んでほしいのだと思った私は一瞬覚悟を決めたが、聞き返してみるとそれは山梨県の方言だった。『『かじる』って『掻く』っていう意味なんだよ』。焦る私を見てケラケラ笑う友人。本当に背中を噛んでおけばよかった。（山内利奈）

ろくに電車に乗ったことのなかった私が、初めて一人で乗ったのが富士急行線でした。都留文科大学前駅から谷村町駅までのたった一駅。それでも、券売機の使い方も知らない当時の私にとっては、ちょっとした冒険です。「たにむらまちまで……」と言うと「やむらまちって読むんですよ」と駅員さん。恥ずかしい思いをしましたが、地名を知ること、少しでも都留に近づけたような気持ちにもなりました。5年前の春の出来事です。（塚原瑞穂）

こではみんな「^{だいわ}台輪」を知らないのか。自己紹介で「私の^{しほた}地元、新潟県新発田市は『台輪』を激しくもみ合う『ケンカ台輪』が有名です」と言ったときのこと。まわりの人は疑問符を浮かべた表情をしている。私は何も悪いことはしていないのに「しまった」という気持ちになった。このショックから立ち直りあらためて説明しよう。「台輪」とは^{みこし}神輿に車輪がついたもので、『ケンカ台輪』には6町内それぞれの台輪が参加する。そのときはショックだったが、私の地元はほかの地域にはないものがあるとわかった。今では誇りに思う。（窪田りさ）



次回予告

こみち (仮)

2018年8月発行予定

マムシグサの知恵



マムシグサの雌株。秋になると種が赤く色付き森のなかでも目立つ



マムシグサの雄株



雄株の苞には小さな穴が開いている(写真の○の部分)

4月下旬になると、本学のキャンパス周辺の森でマムシグサを見かけるようになります。ヘビが頭を持ち上げたような形をしていることから一度目にしたら忘れることはありません。本学の学生にも人気の高い植物のひとつです。

マムシグサは北海道から九州に分布し、山地の湿った場所に生えます。じつはこの植物には雄と雌の株があります。じつと観察してみると、つぼみを包んでいる苞^{ほう}と呼ばれる部分に小さな穴が開いている株があることに気づきます。これが雄の株です。

雄の株にきた昆虫が花粉をつけて外に出られるように「脱出口」の役割をしているといわれています。この「脱出口」を見るたびにマムシグサの知恵に感動してしまいます。

秋になるとまったく形をかえたマムシグサに出会えます。1年を通して変化を観察する。それもフィールド・ミュージアムの楽しみのひとつです。

フィールド・ミュージアム

「都留フィールド・ミュージアム」とは？：私たちのフィールドは、特定の地域に固定はしませんが、とくに都留市を拠点として富士山とその山麓、桂川（相模川）流域に注目して活動しています。

名称について：大学だけの取り組みではなく、広く市民と共有し、地域に開かれた交流を育みたいという思いから、「都留フィールド・ミュージアム」という表記を用いています。本学の地域交流研究センターが、この活動を担っています。